

スクールカウンセリングにおけるコラボレーション

片 平 眞 理

学校システムの外部から短時間学校を訪れるスクールカウンセラーにとって、学校内外のリソースの活用は重要である。コラボレーションという視点に立って、不登校の高校生の援助を行なった事例を通して、スクールカウンセリングにおけるコラボレーションのあり方について検討した。学校内の養護教諭、担任、管理職だけでなく、家族や友人などの周囲の人々の理解や援助は大切である。スクールカウンセラーが、つなぎ手としての役割を発揮することによって、リソースを有効に活用することができた。

キーワード：スクールカウンセリング、コラボレーション、不登校

I. はじめに

平成7年度から、文部省（当時）のスクールカウンセラー活用調査研究事業がはじまり、学校にスクールカウンセラーが派遣されるようになった。当初は、全国で154校、鹿児島県では、小、中、高校各1校からスタートした。当時の実施要綱によると、スクールカウンセラーの職務として、スクールカウンセラーは、校長等の指揮監督の下に、概ね以下の職務を行うとある。

- ① 児童生徒へのカウンセリング
- ② カウンセリング等に関する教職員及び保護者に対する助言・援助
- ③ 児童生徒のカウンセリング等に関する情報収集・提供
- ④ その他児童生徒のカウンセリング等に関し各学校において適当と認められるもの

ここでは、問題を抱えた児童生徒個人に対する援助に主眼がおかれている。

平成13年度以降は、調査研究事業から補助事業となり、全国の公立中学校を中心として配置されることとなった。スクールカウンセラーは、原則として週2回、1回当たり4時間で年間35週の勤務となっているが、予算や人的資源の制約によって、必ずしもこの条件が満たされていない。

種々の制約がありながら、スクールカウンセラーが、配置されるようになって平成18年度で12年目となる。その間、さまざまな取り組みがなされてきた。村山

(2000) は、スクールカウンセラーが専門家として学校現場にもたらしたメリットとして、

- ① 児童生徒・保護者への直接的援助
- ② コンサルテーションの有効性
- ③ 専門家としての優秀なスキル
- ④ 校内研修会を通じて、カウンセリングの理解が深まった
- ⑤ 事例検討会で教師のもたない視点の提供をあげている。

ところで、スクールカウンセラー事業が始まった当初は、スクールカウンセラーがいかに専門性を発揮するかということに目が向けられていたが、週に数時間、場合によっては月に数回という限られた勤務のなかで、学校のかかえる問題に対応していくには限界がある。そこで、学校、家庭、地域とのコラボレーションが欠かせないということは明らかである。コラボレーションについて、亀口(2002)は「所与のシステムの内外において異なる立場に立つもの同士が、共通の目標に向かって、限られた期間内に互いの人的・物的資源を活用して、直面する問題の解決に寄与する対話と活動を展開すること」と定義している。

福祉や医療などさまざまな領域において、コラボレーション(協働)にもとづく臨床実践がなされるようになってきた。「クライアントこそ専門家である」というナラティブ・セラピーのアンダーソン(Anderson, H.)とグーリシャン(Goolishian, H.)は、「専門家」と呼ばれる人がクライアントの問題を解決するのではなく、「クライアント」と呼ばれている人も含めて、問題にかかわる人々それぞれが専門家であると述べている。また、コラボレーションには、相互性、目標の共有、リソースの共用、広い視野で考えること、対話などの原則がある(ヘイズ、高岡、ブラックマン2001)とされている。学校においては、管理職、担任、養護教諭などさまざまな立場の違いを超えて、困難をかかえる生徒にかかわることが求められる。また、生徒自身が問題の解決については、自らの問題の専門家ということができる。

II. 学校臨床におけるコラボレーション

1. 学校内リソースとのコラボレーション

学校では校長の監督のもとで、担任、養護教諭、教科担任、事務職員が、学習・教育活動に関する業務を分担(校務分掌)している。スクールカウンセラーとい

う外部からの非常勤が、学校内の人々と協働していくためには、心理臨床の専門家としての職務に固執しては、その専門性を発揮することも困難となる。管理運営の責任者である校長が、スクールカウンセラーに抱いているイメージや期待を知ることで、他の教職員との協働関係が取りやすくなる。不登校などの問題をもつ生徒の担任は、学校側の方針や自分の価値観と生徒や保護者の価値観とのずれ、養護教諭との関係などによってストレスを感じている場合が多いが、生徒の目標達成のためには、有力なリソースとなる可能性もある。一对一の面接というスタイルをとってしまうと、これらの人々をリソースとして活用できないばかりか、敵対する関係を作り出してしまふことになりかねない。

養護教諭は、学校内ではスクールカウンセラーの立場に近いが、近いがゆえに協働する際には立場を尊重することに配慮が必要である。また、生徒の立場に近い養護教諭との連携については、スクールカウンセラー事業の当初から言われていたが、養護教諭との連携に際しては、学校システムにおける養護教諭の位置に配慮しないと、養護教諭の校内での立場を孤立させてしまうこともある。

クラスメイト、部活の仲間等はスクールカウンセラーが直接協働するというよりは、生徒との語りのなかで、生徒がリソースとして気づくことによって、生徒の解決に協働する者となる。

2. 学校外リソースとのコラボレーション

学校外でもっとも影響が大きいのは、父母、きょうだい、祖父母などの家族である。家族の一員としてペットが位置づけられていることもある。塾や学校外で参加しているサークルや他校の友人、家庭教師といった人的なリソースもあれば、かかりつけの医療機関、教育センターなどの相談機関、フリースクール、親の会などもある。問題をもった個人に焦点をあてていると、これらがリソースとして役立つということに気づきにくく、協働という発想は浮かびにくい。

3. つなぎ手としてのスクールカウンセラー

スクールカウンセリングにおいて、スクールカウンセラーが、来談した生徒に直接援助することもあるが、担任や養護教諭に対するコンサルタントとしての役割をとることが、より早期の解決につながることもある（片平ら、2000）。コンサルテーションについて、金丸（1999）は、コンサルティとコンサルタントが対等であること、互いにその立場とその専門性を尊重し合える関係であることが必要であると述べている。学校臨床においては、教育の専門家である教師と、臨床

の専門家であるカウンセラーが対等な立場で問題解決を行う。これは、医療、福祉、教育、産業などさまざまな分野で、最近さかんに提唱されているコラボレーションとも通じるものである。

亀口ら（2004）は、学校内コラボレーションのモデルとして、多重焦点法を提唱している。カウンセラーはコラボレーション・チームの主要なメンバーとしての役割をもち、チームには多様な人材が加わることが可能である。ただし、学校内でのコラボレーションの最大の障壁として、メンバーの総数が増加することによる協議の開催のための時間調整の難しさをあげている。

コラボレーション・チームを作り、生徒を支援しようとした場合、いじめ、校内暴力、学級崩壊など、学校全体あるいは複数の児童・生徒がかかわる問題のときはチームが結成されやすいと考えられる。しかし、教師から個人の資質に原因を帰される可能性の大きい不登校といった主訴の場合、決まった曜日に週1～2回しか訪問しないスクールカウンセラーが、チーム作りを提案しても実現は難しい。そこで、スクールカウンセラーは、担任と協働したり、養護教諭と協働したり、担任と養護教諭の協働を促進したり、問題の専門家である生徒と協働したりと、さまざまなリソースを結び付ける扇の要の役を果たすことによって、リソースを活用することができるし、生徒が学校内外のリソースに気づき、協働するよう援助することもできる。

本論文では、スクールカウンセラーとして、コラボレーションという視点に立って、不登校の高校生A子と彼女を取り巻く人々とかかわった事例について述べる。

Ⅲ. 事例

1. 事例の概要

クライアントとされた人：高校2年生A子。高校2年に進級して間もなく、同級生のB子が、話をしている急に怒り出して辞書を投げつけた。それ以来、B子に会ったり、教室に入ろうとすると過呼吸発作を起こし、休みがちとなった。たまたまに登校しても教室に入ることができず、保健室で過ごしていた。

学校内リソース：スクールカウンセラー2名（以下SC1、SC2とする）。いずれも女性で、スクールカウンセラーの勤務形態は、二人のうち一人は午前9時から午後1時まで、もう一人は、午後1時から5時までで一人4時間ずつあわせて8時間の勤務。午前と午後の勤務は偶数週と奇数週で交代し、交代時に打ち

合わせを10分ないし15分行った。週1回ずつ、年間35週勤務した。養護教諭2名（以下養教1、養教2とする。養教1は経験年数20年のベテランで、養教2は本校が初任校）は、保健室登校のA子の相談や介護、担任とSCや、親とSCとのつなぎ手としての役割をもっていた。担任は化学担当で、A子に出席を促したり教室に入りやすい状況を作ろうと努力していた。写真部に属し自分で現像までするA子にとっては、担任は話し易い面ももっていた。C子（A子の友達）は、休みがちなA子を誘う、ノートを貸す、登校したときには一緒に昼食を食べるなどA子をサポートしていた。校医（内科医で本校卒業生）は、検診などで学校を訪問したときに、保健室に寄ってA子の容態について養教の質問に答えたり、様子を診たりした。

学校外リソース：A子の家族は、同居する母親、父親、妹、弟と、時々A子が訪ねる県内に在住する祖母がいた。A子が通院する心療内科医院の医師は、A子にとってはよき理解者であった。SC2は、フリースクール親の会のファシリテーターとして、A子の母親とかかわった。D男は他校の生徒だが、A子の写真撮影仲間として、家にこもりがちなA子が外出するきっかけを作った。家庭教師、近所の女子大生もA子がリソースとして語った人々であった。

2. 経過

(1) A子との面接

A子とは、A子が高校2年の1学期半ばに母親との面接の1週間後に始めて会った。A子自身がリソースに気づき、活用できるように援助することを心がけて面接を行なった。A子は、養教1の勧めで相談にきた。教室に入ろうとすると、過呼吸発作が起きるので、保健室登校しているが、家でも過呼吸が起ることがあり、身体が硬直し、意識がなくなることもあった。〈比較的いいときは？〉と尋ねると「D男と電話で話しているとき、ゲームをしているとき、音楽を聴いているとき」と答えた。ミラクルクエストには「朝はすっきりと目覚めて、教室に入り、辞書を投げつけたB子になぜそうしたのかを聞く、過呼吸や硬直が起こらない、母親がうるさく言わない」と答えた。「～ない」という答に対しては、どのような状態が望ましいかを具体的に聴いたが、面接の初期には明確には描けなかった。緊張が強いので、イメージを使った安定感のワークを行なった。

家庭では、母親と夜に団地内を散歩するとリラックスできることや、大学生の家庭教師が、話を聞いてくれることが、役に立っていた。1学期末には、養教1と一緒に、クラスからは離れた所であったが、発作を起こさずに、校内水泳大会

を見学できた。「中学の頃は、涎が垂れるほど笑っていた。あの頃のようにになりたい。」と話すまでになった。

夏休み中は、隣に住む女子大生と大学の図書館や街に出かけ、外出を楽しめるようになった。そこで、エンブティチェアを使って、B子に言いたいことを言うというワークをした。B子に対する怒りの表出は出なかったが、この頃には、B子から声をかけられても、以前のように過呼吸は起きなくなった。教室に入る準備として、クラスメイトに電話で授業の進捗を聞いたことや、どの授業から始めるかということが話題になった。また、「母は、うまくいくと母のおかげとか、～さんのおかげと言う。私がんばっているのに。」と、不満を表現できるようになった。2学期半ばに、教室復帰の話題が現実的になると、家では不安や憂うつになって、家族に怒りをぶつけているうちに、興奮して意識がはっきりしていないこともあった。一方で、友達にプリントを借りたり、学校で勉強できるようになった。写真部の活動には参加していた。

2学期末に、担任には欠席、欠課時数をきちんと家族や本人に伝えて欲しいと要請していたので、3学期になって、SC1とSC2の二人で、進級についてA子と話し合った。

SC1〈進級できる確率はどのくらいと思う?〉「5分5分と思います。」SC2〈授業に出席できないで進級することに負い目はない?〉「ありません。進級できればラッキーと思います。」SC2〈5分5分と思う根拠は?〉「クリニックの先生から、保健室登校で、試験を受けておけば大丈夫と言われました。」SC1〈そのことを学校側に確かめるように言いましたが…〉「確かめていません。母が先生から渡された欠課時数を書いた表を見せましたが、パニックを起こして見ていません。」A子はまだ現実に向き合うには、厳しいようであった。

校長、教頭とSCとの話し合いで、ほぼ進級は不可能という学校側の見解を受けて、A子、母親、担任、SC1、SC2で話し合いの機会をもった(後述)。この直後に、学校側の突然の方針転換で、A子の進級が決まった。

担任やA子の要望が受け入れられて、クラス編成にも配慮され、3年生に進級してからは、教室復帰しているという報告を聞いた。1学期末になって、養教から最近欠席が続いているという報告があったが、本人と会う機会はなかった。

2学期の最初の訪問日に、A子が「6月6日から、欠席しています。どうしても卒業したいと思い相談に来ました。」と言って、相談室に来た。7月から学校近くのアパートで一人暮らしを始めたこと、過呼吸の発作や身体が硬直することはなくなったが、胸がドキドキして不安で手足が震える、4月からはクリニック

に行っていないことを話した。自分から進んで相談に来たことをねぎらったあと、クリニックで薬を処方してもらうこと、保健室登校から始めて、教室復帰を目標にして卒業をめざすことを確認した。

2学期半ばには、担任から「もうこれ以上休めない」と言われ、プレッシャーを感じるが、副担から「頑張り過ぎなくていい」と言われ、頑張ろうという気持ちももてた。しかし、「頑張っても卒業できなければ、頑張ったことが無駄になる。」と、過程を大切にするとといった考えは受け入れられなかったが、そのようななかでも、卒業に向けて今できることに取り組むという目標は決めた。1日3～4時間は、授業に出席するようになった。役に立っていることとして、養教や副担の支え、過呼吸への対応として、去年から取り組んできた安定感のワークが、身体の変化に気づき、コントロールすることに役に立った。テストを受けるための工夫として、「100%をめざして0よりも、30%を目標にします。」と、柔軟性がみられるようになった。

学校も、単位修得に関して、柔軟に対応するという方向を打ち出した。2学期から3学期にかけては、出席不足の教科については、教科担当の教師のところに課題を受け取りに行き、期日までに提出するということに取り組んだ。先生の机の上に置かれたままの課題はいつまで経っても減らないが、自分の手元にある課題は一つずつ積み上げることはできるので、達成した場面をイメージしてもらいながら、どの教科から行くか、苦手な教師のところはどうやったら行けるかを〈社会はどうやってできたの？国語と英語はどちらが行きやすい？できたときのご褒美は？今できることは？〉と、具体的な行動目標を立てて実行した。体育の単位取得のために市営プールに6回行くという課題については、どのように取り組むかを、SC1・2でコンサルテーションを行なった。

1月には、受験予定の大学の下見に行ったこと、雑誌に写真を投稿したこと、受験についての取り組みなどを話した。

(2) A子の母親との面接

養教1のすすめに応じた母親が来校して、A子よりも先に、母親との面接が始まった。母親には、面接のなかで話されたことで、学校との情報の共有がA子の問題解決にとって役立つと思われることについては、母親の了解のもとで、養教や担任にも話して、一緒に取り組みたいと伝えた。

主訴は、A子がB子とのトラブルのあと、しばしば過呼吸発作を起こし欠席すること、登校しても保健室で過ごし、教室に入れられないということであった。来談を労ったあと、学校に行く日と行かない日の違いを尋ねると、行くときは着替え

るが、行かないときはただだらしめているので、「行け」とは言わないということであった。毎日の生活のなかで比較的うまくいっていることについては、発作が起こったときは、やさしく接するとすぐにおさまる、子どもの話をよく聞くようにしている、夜一緒に散歩に行くときよく話す、家庭教師が来ているときは、元気があるし、夜もよく眠っている、子どもには「がんばれ」と言わないようにしている、仕事に行くことで自分自身のストレス発散になっているということを話された。いろいろな資源を活用されていることを聴きながら、フィードバックすることで、ほっとした表情になった。

A子とは別々に面接したので、親子のかかわり方については、A子は親がかまいすぎると言い、母親は「できるだけ言わないようにしている」と、親子間でずれがあることがわかった。それを直接ぶつけるのではなく、母親に対しては〈比較的A子さんの状態のよい日はありませんか〉と尋ねることで、「私がレクリエーションのグループで家を空けたときは、A子の調子がよかったです。」とA子との距離のとり方に気づかれた。母親としてうまくやれたこと、A子の発作が起きなかったとき、A子が人とのかかわりでうまくいったときを丁寧に聴いてフィードバックすることで、面接外の変化に注意を払った。

2学期になって、SC2がフリースクールで行なっている親の会（週1回で12回のセッション）に参加されるようになった。

その後は、A子を迎えに来た日とSCの出勤日が重なったときに、近況や困ったことを聞き、コンサルテーションを行なった。

(3) 養護教諭、担任、校長、教頭とのかかわり

養教からは、A子の保健室での様子や担任との連携について必要に応じて聴いた。A子が保健室で休養しているとき、迎えに来た母親との対応や、クラス替えによって起こりうることなどについて、コンサルテーションを行なった。

担任とは、A子の父親から「娘が学校に行けなくなったのはB子のせいだ。娘がこんなに苦しんでいるのだから、B子に怒ってやりたい。保護者にも文句を言いたい。」と電話してきたので、どのように対応したらよいのかという相談を受け、〈A子さんのことで、とてもつらい思いをされて、なんとかしてやりたいと思っていられるんですね。親として当然です。A子さんもとてもつらいことでしょう。ただ、A子さんにとっては困難を乗り越えていくことを学ぶチャンスだと思います。〉と、丁寧に対応してくださいと伝えた。しかし、その後父親からは連絡はなかった。

父親の怒りについては、SCが養教から話を聞いていたので、母親に〈お父さ

んの怒りは当然です。今後、A子さんが乗り越えていくことを、どのように援助していけばよいかを、ご一緒に考えていきませんか。と伝えてくれるように頼んでいた。

A子からの希望で、A子を保健室に近い教室にクラス替えをするという提案が教頭から担任にあった。担任には、過剰な期待はしないで、無理なくA子のできることからしましょうと伝えた。

養教から、担任と今度クラス替えになった担任、管理職との連携について、必ずしもスムーズにっていない、時期が早すぎたのではないかと、まわりの期待が大きすぎたのではないかとという懸念が述べられた。SCは、保健室での養教のA子に対する対応をねぎらい、本来の担任と新担任のつなぎ手としての養教の努力を聴きながらフィードバックした。

3学期になって、校長、教頭とは、SC1、SC2の二人でA子の進級についての話し合いをもった。学校としては、9分9厘進級は無理との見解を示された。そこでSC1は、進級することのメリットとしないことのデメリットを、SC2は進級しないことのメリットとすることのデメリットを話した。規程上進級できないということだけでなく、進級しないことにも肯定的な面があること、進級したから解決とばかりは言えないことなど、あえてSC同士が異なる見解を管理職の前で述べることによって、学校システムのもつ価値観とは違う価値観を示すことに注意を払った。そのうえでSC2は、進級できないのであれば、A子の努力を具体的に述べて、ねぎらってほしいと、留年を告げたあとの配慮をお願いした。

留年がほぼ確定という状況のなか、本人に留年を伝えるのは、学年末に担任からということであったので、そのときに備えての面接を、A子、A子の母、担任、SC1、SC2で行なった。

5人で今までの取り組みを振り返りながら、そのなかで役に立ったこと、工夫したこと、努力したことを、A子と母親に語ってもらった。それをSCが一つ一つフィードバックしながら、どう受けとめて今後にどのように活かせるかを話し合った。進級することのメリット、デメリットについても話し合った。そのうえで、〈進級できなかったときは?〉というSCの質問に、A子、母親とも「過呼吸が起きると思う。」と答えたので、SCは〈当然でしょう。〉とノーマライズした。

そのあと、養教1・2、担任、SC1・2の5人で面接の内容を共有し、SC1・2で教頭に面接の報告をした。後日談であるが、県教委から前向きに検討するようにとのことで、A子は進級した。

A子が3年に進級したあとは、教室復帰したので、養教からときどきA子の近

況を聞くだけであった。6月になって、欠席が続くようになり、担任から相談があったが、予測されたことなので、卒業要件等担任として必要な情報は家族に伝えてくださいと、お願いした。2学期になって、A子は保健室登校を始めた。A子以外にも保健室登校の生徒が数名いて、その生徒たちの卒業の可能性について、教頭を通して学校側に検討するようお願いした。教員間での検討の結果、課題を提出することで欠課を補うことが決まった。

IV. 考察

スクールカウンセラーとして、A子が高校2年から卒業までかかわったが、学校内でスクールカウンセラーが直接A子にかかわれる機会のごくわずかである。それに対して、A子が自分を取り巻く環境から受ける影響はさまざまであり、その影響はカウンセラーから直接受ける影響よりもはるかに大きいと考えられる。

ダンカン (Duncan, B.L.) ら (1997) は、心理療法における変化に関して、治療の成功に寄与する要因のうち、クライアント要因が40%であったと述べている。したがって、スクールカウンセラーとして、A子が自分自身の力を発揮し、目標に向かうための援助としては、A子の活用できるリソースを共に探してゆくことといえる。

学校内で人的資源を結び合わせるためのコラボレーション・チームを作ろうとすると、さまざまな困難がある。多忙を極める学校現場において、週1回のみスクールカウンセラーの訪問日に合わせて校長、教頭、養護教諭、担任、教育相談係などからなる話し合いの場を設けることは不可能に近い。そこで、スクールカウンセラーには、A子を取り巻く学校システム、家族システム、地域システムなどを視野に入れて、それらを有機的に結びつけてA子にとってのリソースとして活用できるような援助が求められることになる。幸い、A子の在籍していた高校は、保健室に隣接して相談室があり、相談の合間に養護教諭と前回の訪問以降の学校での様子や、家族からの連絡といった情報の共有がしやすい環境にあった。そしてA子との面接についてA子の了解のもとで、対応を話し合うことができた。

スクールカウンセラーが、A子や家族との対応について担任と話し合うときには、養護教諭が担任とのつなぎ役となった。担任とは、A子や保護者に対して出席や進級などの情報提示、教科担任との連絡、教室内の座席やA子との連絡係の生徒の決定といった学級内での調整について、いつ、どのようにするかに関し

て、こまめに連絡を取り合った。進学校の担任として、生徒を叱咤激励する立場にありながら、不登校の生徒を理解しようとするれば、教師自身の中に不協和が生じるし、管理職との板ばさみになることもある。スクールカウンセラーとして、担任の立場に配慮しつつ協働していくことを心がけた。

スクールカウンセラーの窓口であった教頭からは、校長への経過報告をしてもらった。また、内規等に関する情報の提供を受けたり、学校としての対応について話し合う機会を設定するよう要請した。その場合、スクールカウンセラーが二人配置されていたことは、異なる視点を示すことができたし、お互いの立場を尊重するというモデルを示すことにもなったと考えられる。スクールカウンセラー間でのコラボレーションといえる。

A子が3年生の2学期後半に卒業判定を控え、欠課時数が規程を超えても、課題提出で補うという柔軟な対応が決定された。このことの是非については簡単には結論はでないが、従来のやり方を変えたという点では画期的であった。

A子とは、解決志向アプローチを基本にした面接を行なった。できるだけA子が活用できるリソースをA子とともに探索し、それをフィードバックした。フィードバックすることによって、A子は面接のなかで探索したりソースと日常生活のなかで協働することが増えたと考えられる。

本事例では、A子とスクールカウンセラー、養護教諭とスクールカウンセラー、A子と養護教諭とスクールカウンセラー、担任と養護教諭とスクールカウンセラー、A子の母親とスクールカウンセラーといったいくつもの協働関係が形成され、機能した。コラボレーション・チームを形成して取り組むことはできなかったが、それぞれの関係のうち必要な部分に焦点をあてながら取り組んでいった。これは亀口ら（2004）が学校臨床における協働的な支援として提唱している多重焦点法の一つであるカメラワーク法に通ずると考えられる。スクールカウンセラーは校務分掌という縛りがないので、配置された学校にうまくジョイニングできれば、立場の異なる人々とのコラボレーションの実践の中核となる可能性は大きい。

A子は目標とした卒業を果たし、志望大学に進学した。

参考・引用文献

Anderson, H. Conversation, Language, and Possibilities: A postmodern approach to therapy. New York: Basic Books. (野村直樹・青木義子・吉川悟訳 会話・言語・そして可

- 能性—コラボレイティブとは？セラピーとは？ 金剛出版 2001)
- Duncan, B.L., Hubble, M.A., & Miller, S.D. Psychotherapy with "Impossible" Cases The Efficient Treatment of Therapy Veterans W. W. Norton & Company 1997 (児島達美・日下伴子訳 「治療不能」事例の心理療法 治療的現実根ざした臨床の知 金剛出版 2001)
- R. ヘイズ, 高岡文子, L. ブラックマン 協働 (コラボレーション) の意義—学校改革のための学校—大学間パートナーシップ 亀口憲治編 学校心理臨床と家族支援 現代のエスプリ407号 至文堂 2001 99-112
- 金丸慣美 コンサルテーション 吉川悟編 システム論からみた学校臨床 金剛出版 1999 47-57
- 亀口憲治 コラボレーション—協働する臨床の知を求めて 亀口憲治編 コラボレーション 現代のエスプリ 419号 至文堂 2002 5-19
- 亀口憲治 コラボレーション—学校臨床における協働— 保健の科学 46(10) 2004 716-720
- 亀口憲治・角田真紀子 多重焦点法による学校内コラボレーションの実践展開 東京大学大学院教育学研究科紀要 44, 2004 201-214
- 片平眞理・十島雍蔵 スクールカウンセリングにおけるコンサルテーション 志學館大学文学部研究紀要 23(1) 2001 1-13
- 村山正治 臨床心理士によるスクールカウンセラーの展開 村山正治編 現代のエスプリ別冊 臨床心理士によるスクールカウンセラー 実際と展望 至文堂 2000 9-22
- 角田真紀子・亀口憲治 学校臨床における協働的支援 亀口憲治編 現代のエスプリ別冊 臨床心理行為研究セミナー 至文堂 2006 236-245
- 鶴養美昭 学校教育におけるコラボレーション—教職員の関係とコラボレーション 亀口憲治編 コラボレーション 現代のエスプリ 419号 至文堂 2002 84-92
- 吉川悟 システムズ・コンサルテーションの学校臨床での利用 吉川悟編 システム論からみた学校臨床 金剛出版 1999 217-234